

すばらしい命の言葉

〔聖書〕創世記1章1～5節

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

1章27～31節

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

〔序〕存在意義を問い直す

早いものでもう6月です。今月は私たちがシンガポールから帰国する前に、連盟の宣教研究所所長の傍ら川越教会の臨時牧師を半年間して下さった松見俊先生を迎えて、22日(日)に教会組織29周年記念礼拝を守ります。来年の30周年記念の備えをしっかりと進めて行きたいものです。

さて教会学校の聖書の学びは、今月から4ヶ月間聖書の冒頭の書創世記です。そこで今日は天地の創造の記事から、メッセージを聞き取って参ります。聖書の書き出しの言葉「初めに、神は天地を創造された」——「初めに」とは「物事を根源から深く考え直してみると」という心を込めた言葉でしょう。

私たちが生きているこの天と地、人間社会、そして自分というものを根本から見つめ直してみる時、先ず認めなければならないことは「全ては神によって創造された」という真理だと、聖書は宣言します。創造されたものには、創造した方の意図・理由が込められています。この私には創造者のどのような期待が込められているのか、それをしっかり把握して生きて行かなければならないと、訴えているのではないのでしょうか。

創世記のこの天地創造の記事は、紀元前6世紀にエルサレムを都とするイスラエルの南王国がバビロン王国に征服され、国王以下重だつた者がバビロンに連れ去られて、屈辱的な捕囚生活を送っていた時期に書かれた文書とされています。彼らは民族存亡の危機の中で、この世界が神によって創造された時にさかのぼって、自分たちの存在意義を問い直してみたのです。

ですから当時の人が持ち合わせている知識で、天地創造を記述しました。昼と夜が太陽・月よりも以前にあったと語っています。全てが6日間で創られたと語っています。今日の自然科学的知識

にはそいませんが、とにかく自分たちが置かれている厳しい現実の中で、どのような信仰をもって生き抜いていくべきかを、祈りつつ書き記していったのでしょう。

[1] 太陽を神としない信仰

今日は、天地創造の記事から、幾つかの点を取り上げます。先ず2節です。「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり」。神が創造の業を始めようとされた時の世界が、混沌、闇、深淵、水という言葉で言い表されています。真暗闇でドロドロとした水で満ちていて、底なしの深い淵の状態だと表現されています。足を踏み込めばたちどころに、底なしの滅びにのみ込まれてしまいます。生きていくことの出来ない無秩序で絶望的世界としか言いようのない状態でした。ですから、命は存在しなかったのです。

しかし神の霊がその世界を覆い、「光あれ」との声が響きわたりました。絶望の只中に向かって、神が希望の光を放たれたのです。暗黒と混沌の世界に、神さまは先ず、命と希望の象徴である光をもたらしてくださったのでした。

詩編42の4節に「昼も夜もわたしの糧は涙ばかり、人は絶え間なく言う『お前の神はどこにいる』と」歌われています。心無いバビロン人は「お前たちの神はどこにいるのか。もしいるのなら、どうして国を守ってくれなかったのか」とユダヤ人を嘲ります。どんなに打ちのめされたことでしょう。

しかし彼らは歌いました。「なぜうなだれるのか、わが魂よ。なぜうめくのか。神を待ち望め。わたしはなお告白しよう。『御顔こそ、わたしの救い』と。わたしの神よ」(6節)。そして涙しながら、私たちが信じる神さまは、天地万物を創造された神なのだとの信仰を、文書にしたのでした。

14節以下の第4の日の記述に注目しましょう。太陽や月を光る物と述べています。他の民族では太陽や月が、まさに神として拝まれていました。例えば世界最古の法典といわれるハンムラビ法典は、紀元前18世紀にバビロン王ハンムラビが、太陽神から授かりました。エジプト王ファラオは太陽神ラーの子として権威を振いました。そのように文明を誇り、世界を君臨する大帝国の人々が神として崇めている太陽や月を、捕囚の民が書いた創世記では、あれは神ではない、単に光る物体ではないと決めつけています。そして自分たちは、神ならざるものを神として自分を権威づけることをしないという信仰を表明しています。太陽や月を神としない民、これは文化史の中で実に珍しい人々ではないでしょうか。

次に20節以下の第5、第6の日に注目しましょう。神さまは水の中にも空にも地にも鳥や魚や動物等の生き物を創造して、それを「良し」とされて、「産めよ、増えよ、満ちよ」と祝福されました。神さまが創造された天と地には命が満ち、神さまはそれを「良し」と肯定し、祝福された——神さまは命を喜び、生きることを望む創造者なのです。

そして創造の業の最後に、ご自分の姿にかたどって、人間を男と女に創造し、祝福して言われ

ました。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」(27～28 節)。ここで言われている「従わせよ」「支配せよ」とは、どういう内容の行動なのでしょう。

[2] 全ての生き物が仲良く共存する世界

ここで私たちは先ず、産めよ、増えよ、満ちよと祝福された生き物たちが、何を食べて生きていたかに注目しなければなりません。29～30 節をご覧ください。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう」。

皆さん。創造者である神にかたどって造られた人間は、木の実と種を持つ草(穀物)を食べ物としていたのです。他の生き物は全て青草を食べて、共々に 産めよ、増えよ、満ちよと祝福されて生きていたのです。全ての生き物が互いに食い合うことをせず、共存・共和の世界だったのです。

紀元前8世紀に活躍した預言者イザヤも、世の終わりにもたらされる世界をこう予言しました。「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子はまむしの巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては何ものも害を加えず、滅ぼすこともない」(イザヤ 11:6～9)。神さまはこの世界を、秩序と調和のある世界として創造されました。この世界は命の家であり、あらゆる命が「良し」とおっしゃる神の肯定のもとで、祝福された日々を送っていたのです。そのような世界を創造して支配しておられる神さまから、人間が委ねられた支配です。生きとし生けるものが全て、喜びをもって生きていけるように管理していくこと、平和的共存を目指す管理です。

ところが今日の世界では、紛争・戦争で殺し合いが続くばかりでなく、普通の市民生活の場でも、人が人を殺す事件が毎日発生しています。命は貴いものであるはずなのに、どうして簡単にその命を殺してしまうのでしょうか。

私がかねがね思っていることなのですが、それは私たちが毎日、魚や鳥や動物の命を奪い、それを食べて生きているからではないでしょうか。酪農家たちは牛や豚や鶏を、我が子のように大切に育てます。でもその命を屠殺場に送って自分の生活を営んでいます。私たちにしても食膳を前にして「いただきます」と合掌しながら、他の生き物の貴い命を奪って、自分の命を養っています。

命を殺して生きている日常生活——やはりこれは間違っています。在るべき本来の生き方ではありません。私たちは皆、肉食主義に戻るべきなのですね。しかし肉や魚のおいしさを知ってしまいました。おいそれと戻れません。手を合わせてお詫びしつつ、罪深さを深く自覚しながら、生きて行かなければなりません。せめて人の命を奪うこと、また他の命をいたずらに奪うことだけは、厳しく戒め合うべきではないでしょうか。

[結] 神のかたちに造られた者として

神さまはご自分にかたどって人を男と女に創造されました。神にかたどってとはどういう意味なのでしょう。新改訳は「神は人をご自身のかたちとして創造された」と訳しました。26 節には「我々に似せて、人を造ろう」とあります。子どもの生き様を見ていると、その親が分かるとよく言われます。顔かたちばかりでなく、考え方や行動が親に似ているのです。これが子は親の像(かたち)を持つということでしょう。神さまはどのような命をも産めよ、増えよ、満ちよと祝福してお育てになるお方です。そのように命を喜ぶ造り主の働きを行って神さまを現すようにと、ご自分のかたちに人間をお造りになったのです。そこで聖書は記します。「神にかたどって人を男と女に創造された」。これは 男と女が愛し合い助け合って、他の被造物と共に、祝福に満ちた、命豊かな世界を維持していくようにという御心でしょう。豊かな愛に生きるようにという御心でしょう。

しかし人はその期待に応えることが出来ませんでした。そして今日このように世界を弱肉強食の混乱に陥れてしまいました。そこで神さまは、イエス・キリストとなってこの世界に来て下さいました。どんなものも分け隔てなく愛する万物の創造者を完全に現す神の像として、キリストはこの世に生きて下さいました。

「わたしを見た者は、父を見たのだ」(ヨハネ 14:9)とおっしゃる主イエスは、山上の説教でこう語っておられます。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも、太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らせてくださるからである」(マタイ 5:43~45)。

イエスさまは、敵を愛し、祈るだけでなく、自分を殺す者の罪の赦しのために十字架にかかって死んで下さいました。ここに真の愛があります。私たちは、自分の罪深さを悔い改めて、イエス・キリストを救い主と信じて、神の子にさせて頂きました。正しい者にも正しくない者にも太陽を昇らせ、雨を降らせる神さまを覚えて、敵を愛し、迫害する者のために祈る者になっていかなければなりません。

すべての生き物を、産めよ、増えよ、満ちよと祝福される世界の創造主の心を、私たちは今日学び直しました。この世界は、生きとし生けるもの全てが喜ぶ命の家であるようにしていくことが、神のかたちに造られた私たち人間の責任であることを、深く心にとめて、生きていかなければなりません。世界は、混沌、闇、深淵、水という無秩序で絶望的な状態に戻っていくではありません。イエス・キリストが再び天より来て下さって、神さまが創造された極めて良い世界を与え直して下さいという約束で聖書は締めくくられています。歴史の究極に示されている祝福を目指して、神の像を与えられている私たちの責任を果たしていくために、神さまの愛の御霊、聖霊の導きを常に祈り求めつつ、生きて参りましょう。

完